青梅市文化財ニュース

第３０５号

平成２５年３月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859）

「新編武蔵風土記稿　浄書稿本」に描かれた青梅の風景

「新編武蔵風土記稿」は今から 185 年前の文政 11（1828）年、江戸幕府によって編纂され、将軍に献上された官選地誌です。現在の JR お茶の水駅近くにある昌平坂学問所に設置された地誌調所において、武蔵国の自然・地理・歴史・風物などを村単位に調査した書物です。武蔵国多摩郡であった青梅市域は、八王子千人同心の植田孟縉・塩野適斎が中心となり、文化 11（1814）年 9 月から文化 13（1816）年にかけて多摩郡の村々を実際に廻って調査しました。その調査を基に編集し、稿本を昌平坂学問所へ提出しました。「新編武蔵風土記稿」は地誌としては珍しく、本文とともに古社寺や旧家に伝来する古文書の写し、古器物の図が多数収録されていることに加えて、たくさんの風景画が挿絵となっています。

これからご紹介する「新編武蔵風土記稿　浄書稿本」は将軍献上本と同一の完成本で、昌平坂学問所が保管していたものと云われています。「浄書稿本」の挿絵は多様な筆を使用した水墨山水画が多く、人物・牛馬等の表現も写実的です。多摩郡だけでも 62 枚の風景画が挿絵となっており、当時の景観を知ることができます。

青梅市内の風景挿絵は「御岳山」「多摩川萬年橋」「奥澤橋」「海禅寺」「日向和田村」「青梅宿」「金剛寺」「石灰焼図」「安楽寺」「塩船観音」「天寧寺」の 11 枚です。

「石灰焼図」「多摩川萬年橋」以外の９枚は、対象を上空から眺める俯瞰法という構図になっています。鳥のように景観を捉え、雲や霞をあしらう、江戸時代の屏風絵や浮世絵に多く使われている手法です。青梅宿の眺望図や現在の日向和田から梅郷地区を描いた日向和田村の眺望図は、当時の家並、道路、河川の様子などが手に取るようにわかります。寺院は境域も描かれており、伽藍配置を詳しく知ることができます。

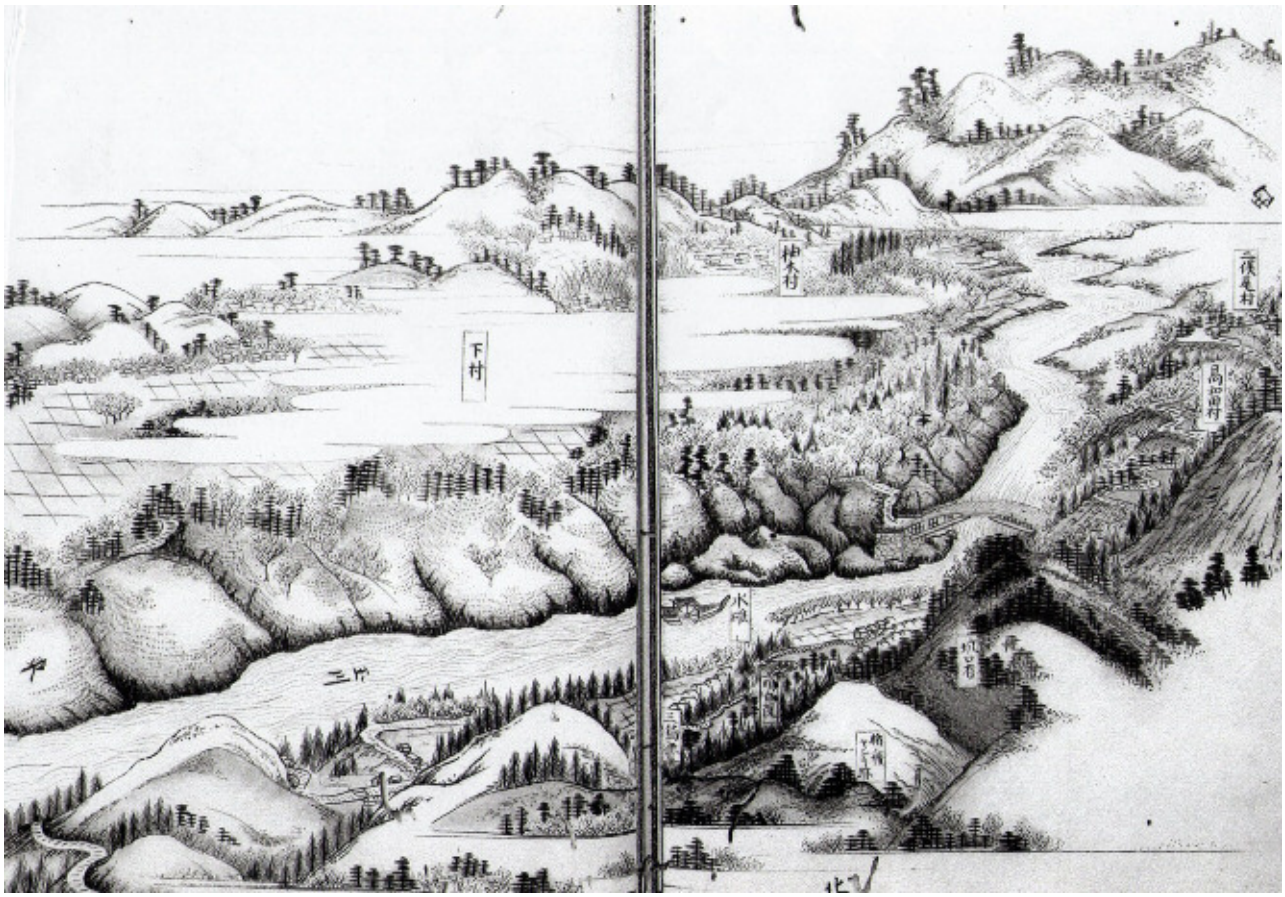
また、上成木村の「石灰焼図」は労働者の姿をリアルに描いています。木の枝を束ねた物を背負子で運び、竈に投げ入れる様子や石灰岩を割っている人物などたいへん細かく丁寧に描かれています。現存しない石灰焼竈の構造を知る貴重な資料となっています。

「多摩川萬年橋」は現在の御岳渓谷に架けられていた木橋です。江戸時代、急峻な多摩川の渓谷に橋を架けることは容易なことではなく、大きな橋として画面いっぱいに描かれています。両岸から大木を投げ出す橋の構造がよくわかる挿絵です。

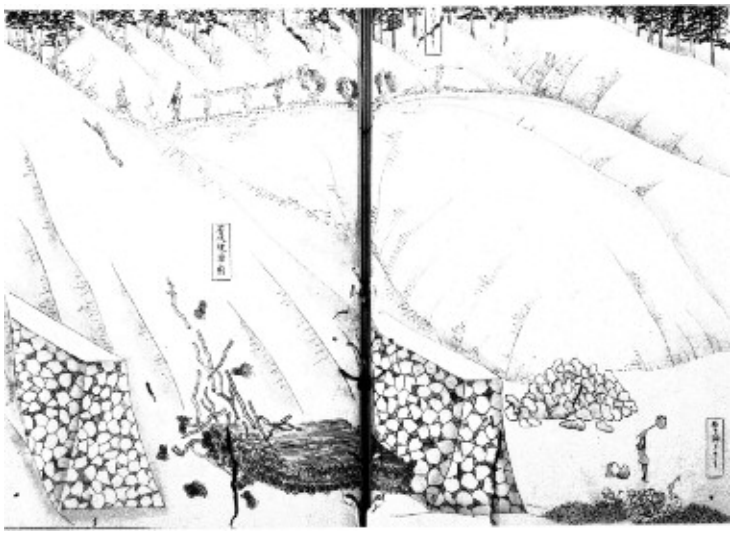
「新編武蔵風土記稿」は明治 17 年、内務省地理局から和装本 80 冊として活字翻刻本が刊行され、初めて一般に知られることとなりました。しかし、挿絵は「浄書稿本」を

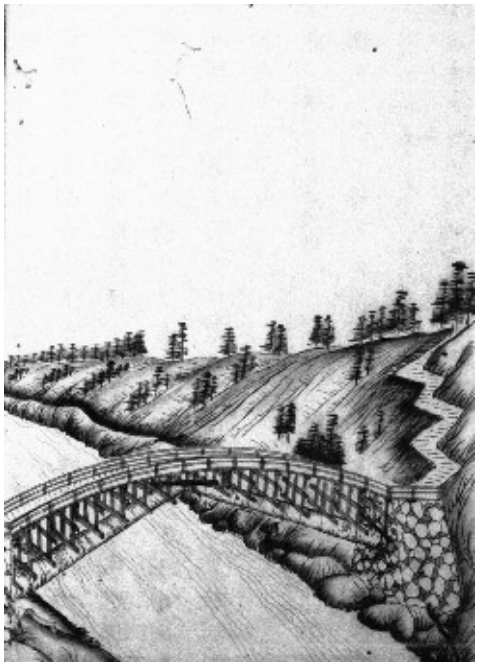
摸写したために、筆致の稚拙さが目立つようになってしまいました。現在、私達が見ることができる「新編武蔵風土記稿」は、内務省地理局本を原本にしたものです。

現在、「新編武蔵風土記稿　浄書稿本」は国立公文書館（地下鉄東西線竹橋下車５分）が所蔵し、一般に公開され閲覧することができます。　　（文責　小島みどり）



国立公文書館蔵「新編武蔵風土記稿　浄書稿本」より「日向和田村」





国立公文書館蔵「新編武蔵風土記稿　浄書稿本」より「石灰焼図」と「多摩川萬年橋」